

5

小牧

○小牧市立小牧原小学校 舟橋 明里

分科会番号

1 9

分科会名

読書・学校図書館

研究題目 本は友達～主体的に読書活動に取り組む子の育成～

1 研究のねらい

(1) 主題設定の理由

変化の激しい現代を生き抜くために、令和の日本型学校教育が教育改革の基本方針として打ち出されている。内容としては、ただ知識や技能の定着にフォーカスをおくのではなく、個々の子どもの幸福感（well-being）を重視する教育への転換を示唆するものとなっている。

活字離れが取り沙汰される昨今、読書と well-being は密接に関係していると考ええる。読書によって、新たな知識を広げたり、登場人物へ共感したりする経験から他者への共感力が生まれるからだ。現代をより良く生き抜くためには、読書活動は必要不可欠である。平成13年12月12日に公布された子どもの読書活動の促進に関する法律にも、「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かな物にし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできない」と表記されている。

小牧市は、2021年に小牧市中央図書館を小牧駅の近くに移転し、新たに開館した。開館時間の拡大やICT機器の導入により利便性が向上した。また、スターバックスコーヒーが図書館内にあり、本を借りだけでなく、会話や飲食を楽しむことができる。多様な座席で長時間快適に過ごすことができる、「滞在型図書館」という側面をもつ。

また、令和7年4月に「第2次小牧市図書館サービス計画」が策定された。内容としては、小牧市中央図書館の開館後の成果と課題を踏まえ、図書館のサービスのさらなる充実を目的とするというものである。その中に、子どもの読書活動への記載がある。お話し会やイベントの開催、図書館のおすすめ本などを掲載した情報誌の発行などを行い、子どもが読書に興味をもちやすい環境を整備するというものだ。学校図書館の連携としては、学校と市立図書館の連絡協議会を設け、情報共有を行っている。また、学校図書館教育研究会が母体となり、「小中学生にすすめるブックリスト」の改訂をした。必要な図書資料を選書してもらい、学校に届けてもらう配本も活用している。

小牧市では、市内の教員で構成された学校図書館教育サークルがあり、各校で行った学校図書館の実践を持ち寄って情報共有をし、互いの実践力を高めている。今回、主体的に読書活動に取り組む子の育成を目指し、各校での実践を検証することで研究を進めた。

(2) 目指す子ども像

主体的に読書活動に取り組む子

(3) 研究の仮説と具体的な手立て

目指す児童像に迫るために、以下2点の実践を行う。一つ目は、クラス内で授業内容に即した様々な本を読む活動を通して、多種多様なジャンルの本に触れ合わせる実践だ。二つ目は、図書委員会で魅力的な図書イベントを開催することで、図書室に行く回数を増やし、読書活動を促進するというものだ。以下のように仮説を立てた。

仮説1「授業内容に即して様々な本を読む活動を行うことで、多種多様な本への興味につながるであろう」

詩や説明文、物語文の授業の際に、積極的に図書資料を活用させる。国語の授業以外でもタブレット端末と併用して、図書で情報を集めさせる。それ以外にも、学校司書や担任がレファレンスサービスを行ったり、ビブリオバトルを取り入れたりすれば、選書の幅が広がっていくのではないだろうか。

仮説2「小牧市立図書館の環境整備を参考に読書環境を整備することで、子どもは様々な本と出会い、主体的に読書活動に取りくむことに繋がるであろう」

「滞在型図書館」として人気を博している小牧市立図書館の環境整備を参考にすることで、子どもが行きたいと思える学校図書館を作ることができるのではないだろうか。

2 研究の実際

(1) 仮説1の検証

小学3年生の国語の題材に「おすすめの一冊を決めよう」というものがある。そこで、ビブリオバトルを取り入れた。ビブリオバトルとは、自身のおすすめの本を班で紹介しあい、一番読んでみたいと思った本を一冊決め、チャンピオンを決めるというものである。一人当たり3分で本の紹介を行い、2分間の質疑応答を行う。その質疑応答の際には、否定的な意見ではなく肯定的な意見を伝えるように指導した。上記のルール説明を行い、一週間前から予告し、自分のおすすめ本を用意し、紹介させた。一回目は2学期に行った。本の紹介を行いやすくするために、本の内容や特徴をまとめさせた。児童は自ら本を選び、積極的に活動に取り組んでいた。活動を終えて、「楽しかったから、もう一度行いたい」という声が多く上がった。そのため、二回目の実践を3学期に行った。資料1は、抽出児童の振り返りである。抽出児童Aはよく本を読む児童、抽出児童Bはあまり本を読まない児童である。

児童A・B共に、楽しくビブリオバトルを行えたようである。他の児童からも、楽しかった、また行いたいといった肯定的な意見が多かった。また、紹介された本を借り、普段読まないような本を読む様子もみられた。新たな本に出会う、良いきっかけ作りとなった。

また、学校生活でも多様な本に触れる実践を行い、様々な本に囲まれる環境づくりを目指した。朝の読書タイムの活動では、私自身のおすすめの本を紹介し、詩集やエッセイなどの様々なジャンルの本を提示した。国語科の俳句の学習では、図書資料で俳句に触れ、イメージを膨らませ、資料2のように情景を描かせた。また、社会科の学習では、調べ学習の際に教員がテーマに合わせて選書を行い、廊下に学年文庫として配置をした。さらに、総合的な学習の時間では、米作りについてまとめ、資料を自作の本として製本し、学級文庫で活用した。係活動では、自作の絵本作りに取り組ませた。その結果、クラス内に多くの図書資料が存在していた。その結果、読書へのよい足がかりが生まれ、多くの児童が自然と本を手取るようになった。

抽出児童の様子としては、児童Aは日頃から読書に親しんでいるため、積極的に図書資料を活用することができていた。授業中でも、文章から情景をイメージし、文章読解への足掛かりを掴んでいた。タブレット端末と図書を用途によって使い分け、必要な情報を精査し、文章から選び取ることができていた。児童Bは読書の習慣が少ないため、本を使って学習をすることに戸惑っていた。図書資料よりも、

児童 A

ビブリオバトルをやってはじめは
むずかしそうだったけど動物のビ
ブリオバトルを見とできそうな
気がしてやってみました。やると
チャンプになってとてもうれし
かったです。

児童 B

ビブリオバトルで3分間話すのがむ
ずかしいけど楽しかったです。

【資料1 抽出児童の振り返り】

【資料2 ワークシート B】



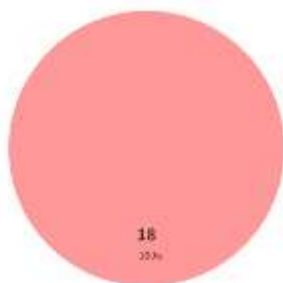
タブレット端末で調べ物を行う様子が多く見られた。読書の必要がある際は、周りの友達の様子を見ながら、ゆっくりと取り組む様子が見られた。

資料3は、読書に関するアンケートを学年末に実施したものだ。クラス全体として、読書に関しての前向きな気持ちが増えたことが読み取れる。抽出児童A・Bにおいても、読書に親しみをもつ様子が見られる。(資料4) 教室内の読書の機会を増やしたことで、クラス全体としての読書への意欲が高まったため、本への親しみがなかった児童Bも変容したのではないだろうか。

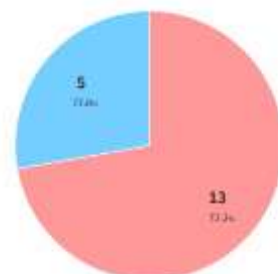
Q1 読書を好きになったか



Q2 色々な本を読むようになったか



Q3 図書室に行くようになったか



【資料3 アンケート結果】

抽出児童アンケート結果	Q1 読書を好きになったか	Q2 色々な本を読むようになったか	Q3 図書室に行くようになったか
児童A	はい	はい	いいえ
児童B	はい	はい	いいえ

【資料4 抽出児童 アンケート結果】

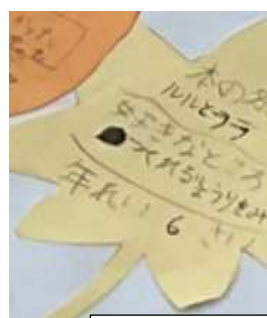
(2) 仮説2の検証

小牧市立図書館の環境整備の特色としては、前述したように「滞在型図書館」を目指しているということだ。居心地のいい空間をつくるために、様々な工夫がされている。また、自然と足が赴くような掲示物などの楽しい空間作りもされている。下記のような居心地の良い空間作りに取り組んだ。

資料5は、読書の木である。おすすめの本を書き、掲示するというイベントを行った。季節に合わせたイベントであり、子どもたちは嬉しそうにカードを書いていた。

資料6は、低いローテーブルとジョイントマットを用意し、座って読書することが出来る空間を作ったものだ。その付近に巨大な絵本と手作り絵本も置いた。そのスペースは低学年に人気が出ている。また、読み聞かせをする空間にもなった。自主的に6年生が1年生に読み聞かせを行っている。

資料7は、図書室の机の上におりがみでかわいい動物を作ったものだ。そこには「椅子をしまおう」



【資料5 読書の木】



【資料6 座って読書するスペース】



【資料7 おりがみの動物】

や「静かにしよう」といったメッセージが書かれている。机ごとに動物が違うため、ワクワクしている子どもたちの様子が見られる。

3 本研究の成果と今後の課題

仮説1について、授業内容に即して様々な本を読む活動を行うことは、アンケート結果から分かるように多種多様な本への興味関心をもたせるために有効であったと考える。たとえ外発的動機であったとしても、まずは読書へのきっかけ作りを教師側から提示することが必要である。

仮説2について、小牧市立図書館の環境整備を参考に読書環境を整備することで、子どもは様々な本と出会い、主体的に読書活動に取りくむことに繋がるという仮説は、十分な検証結果を得ることが出来なかった。今後も引き続き実践を続けていく必要がある。

今後の課題としては、外発性動機をいかに内発的動機に変容させていくかである。外発的動機だけでは読書活動は一過性のものになってしまう。単発的な取り組みに留まらず、継続的な指導の仕方を模索しなくてはならない。児童が読書そのものを「楽しい」と感じ、読書することによって豊かな人生、つまり **well-being** に繋がっていくと実感させなくてはならない。そのためには、学校や市で統一された読書活動のカリキュラムを作成する必要性を感じる。継続的な支援となるよう、市全体で協力していきたい。

今後も、学校図書館サークルで自分たちの実践について交流を図りながら、児童がより主体的に読書活動に取り組むことが出来るよう、研究を重ねていきたい。